

「戦後 76 年を考える旅」を巡って

2021・11・20～21



小笠原丸殉難の碑

三船殉難慰霊の日



沼田町指定文化財 昭和炭鉱



昭和炭鉱史跡図

札幌駅東口に午前 8 時半に集合、全員が集まり、いよいよ旅の始まりです。青空も見え天気は上々、初冬というより晩秋に近い季節模様です。座席もゆったり札幌観光バスに乗り込み、いざ出発。石狩街道を北上し石狩川に架かる最後の白い橋「石狩河口橋」を通過し、横手に日本海を臨みながらしばらくすると望来に至りました。秋の季節に通り過ぎりの戸田記念墓苑公園横の農家さんの畑で義父や妻と一緒に太い大根を抜き取った昔の思い出が蘇りました。2018 年 4 月 27 日にオープンした「あいろーど厚田」道の駅で一休みです。二十数年前にはよく海遊びに厚田漁港やその近くの岩場の遊び場を訪れ、1996 年の 8 月には中国四川省からの我が家にホームステイした 2 名の女子中学生を案内して蟹取りに来た場でもあります。道の駅郷土資料室には厚田村出身の作家「新選組」で著名な子母澤寛の自筆原稿が有ったり、子母澤と異父弟になる画家三岸光太郎も紹介されたりしております。思い出一杯詰まっている厚田を後にして更にオロロンラインを北上、難しい漢字の読み方でよく出て来る濃昼(ごきびる)を通過し浜益に至ります。そして昔は陸の孤島と呼ばれた雄冬地区に至りますが昭和 56 年(1981 年)11 月、「雄冬峠トンネル」の完成で今は日本海サンセットビーチに沿って連なる 4 市 11 町 1 村の 16 エリアを最北に貫くオロロンラインとして国道 231・232 号線は南北 1 本に結ばれました。

今回の旅の主目的は終戦直後、樺太からの疎開船 3 艘が旧ソ連軍の潜水攻撃を受けて 1945 年 8 月 22 日朝、日本海で受難し尊い命を奪われた多くの方々への慰霊とその歴史を知る事です。1456 トンの小笠原丸は増毛沖で撃沈、小平町の鬼鹿沖では、2577 トンの第 2 新興丸が大破して留萌港へ入港し、そして 887 トンの泰東丸は撃沈し、海の藻屑と化したのです。外務省の 51 年の調査資料では死者・行方不明者は推定で計 1708 名との事です。「記録は有っても記憶は薄れていく」と事件の風化が憂慮されています。留萌市では昨年から事件当日、黄金岬に立つ三船遭難の慰霊碑「平和の碑」前で、留萌高校吹奏楽部の卒業生や市民有志らが追悼式を始め、遺



族会と連携して継続できないか模索している、との新聞報道でした。昼食は増毛の「まつくら」でお寿司との事でしたが、昼食迄少々時間が有りましたので駆け足で創業 140 年を迎えた「國稀」を訪れ、お元気そうな本間櫻さんに面会する事が出来ました。「点字図書館の創設」とその充実を図られた「本間一夫」氏がこの國稀が生家と知ったのは数年前の事でした。國稀ロゴ入りの手袋と私の好物國稀特産の吟醸粕「山海漬」を買い求めました。



時間に余裕が出来たので明日のスケジュールにある昭和炭鉱跡地を訪ねる事になりました。昭和炭鉱は 1930 年 1 月に開業、1969 年 4 月 30 日に閉山になり、今はもうダムの水の中に沈んでしまっております。多くの炭鉱でそうだった様に、この昭和炭鉱でも中国人、朝鮮人の強制労働が行われていたのです。劉連仁さんもそのお一人、終戦を知らず逃亡生活



西田信春碑



を送った出発地が昭和炭鉱です。さて 1 日目は無事予定行程を終了し沼田町に有る「ほろしん温泉ほたる館」に 4 時半頃到着しました。ぐっすり睡眠休養を取った翌日朝 6 時頃窓から外を覗くと綺麗な



樺戸博物館



見事な雪景色、初雪模様です。何か良い事有りそうな気配です。バイキングの朝食を食べ、出発時間の 9 時には天気も上々、雪も止み、いざ、2 日目出発です。先ずは新十津川に「西田信春」の碑を訪ねました。西田信春の名を知ったのは

2020 年 2 月 11 日(西田の命日)上杉朋史氏が出版した「西田信春-甦る死」からで、朝日新聞の広告欄に書籍紹介が有りました。札沼線界隈にこんな優れた人がいるのか、ビックリして本を買い求めました。小林多喜二と生き様や出生、没年が同じというのも興味津々です。雨竜村の小作争議や蜂巣賀農場の応援も手掛けましたが 1933 年 2 月 10 日弾圧検挙され、福岡警察署で十数時間に及ぶ拷問を受けましたが黙秘を貫き、翌日午前深夜に虐殺されました。「氏名不詳」「病死」とされ福岡市内の無縁墓地に葬られたそうです。1990 年、郷里の新十津川町に「西田信春碑」が作られました。新十津川の次は月形の「樺戸博物館」や「囚人墓地」を巡りました。樺戸博物館は改修されて見応えたっぷりです。



劉連仁生還記念碑

最後の訪問は「劉連仁生還記念碑」です。終戦を知らず 13 年間、山中での逃避行を続け、当別町で偶然発見されました。発見された後、当別町を何度も訪れ交流を続け、平成 12 年に 87 才でなくなりました。収穫一杯の旅になりました。



館